

日本記者クラブ会報

記録版

■二〇〇一年五月三十日（水）昼食会

同質性と異質性を

共存させての韓日交流

崔相龍 駐日韓国大使



東京都千代田区内幸町一丁目
日本プレスセンタービル
◎社団法人 日本記者クラブ
電話 ○三一三五〇二一七二二

朝日の船橋さんのコラムを読んで、私はビックリしたんです。大使はそういうものなのか。それから毎日、反省しながらこの職をこなしています。

歴史的な事実は砂の上に書いた文字ではない。時間の経過による風や人の手により消せるものではない、と述べ、歴史教科書問題で韓国側が示した三十五項目の再修正要求に、日本側が冷静に学問的に答えることを求めた。

一年前にも、この席で私の見解を述べまし

てご理解いただきたいと思います。

たが、私の日本語は私の意見を正確に表すにははなはだ不十分です。この職になりますと、私の概念なり、使っている用語がいろんな角度から解釈されたり、誤解されたりするので非常に怖いのです。私なりに言葉を選びますが、失言があつたら、その辺の事情もくんで

今日の話は大使としての公式的な見解と皆さんと同じ知識人の一人としての意見、そして日本人の友人としての私の気持ちが交じり合うと思います。

昨年だったでしょうか。「大使はその国の顔であり、個性であり、品格である」という

ところが最近、教科書問題で両国の指導者が悩んでいる。できれば、今日は私の方から、皆さんの教科書問題に対する意見をお聞きしたい。もちろん、私も私なりの意見を述べます。

10ページ

集団でなく個が動き出した

堂本暁子

千葉県知事

今日は、大体問題を四つに絞って見解を述べたいと思います。一つは歴史問題、二つ目は文化交流の大しさとその意味づけ、三つ目は日本と韓国の関係で、最優先で国民的利益につながる経済関係、最後に関心の的である韓半島における南北関係です。

「パートナーシップ共同宣言」の精神

まず歴史問題です。両国における歴史問題の原点は、三年前の、金大中大統領と当時の小渕総理大臣との間で合意された二十一世紀パートナーシップ宣言の精神です。これは村山談話の具体化でした。私は一九九五年の村山談話を何度も心を込めて読みました。私の日本についての理解はまだ浅薄ですが、私の知る限り、天皇制を持つている日本が現状で望み得る、非常に良質な歴史認識であると受け止めました。私は「これを原点にしたらどうか」と大学や政治の場などいろいろなところでアドバイスしてきました。このパートナーシップ共同宣言は、まさに村山談話の精神の具現化でした。

共同宣言は二ページぐらいの短い文章で、大体三つの柱でできています。一つは過去の直視です。もちろん、そのうえに立つて未来志向があります。一番目は村山談話の核心た

る内容です。痛切な反省と心からのおわびです。三番目は若い世代の歴史認識の深化です。教育という言葉こそ入っていませんが、中身は歴史教育とも関連があると思います。この三つの内容が含まれております。

この前、教科書問題で韓国の国民、有識者、指導者がかなり怒りました。その理由を私なりに分析してみると、問題になつている教科書の内容がパートナーシップ宣言の三つの精神に反する、その精神から後退していると判断したようです。正直言つて、私もそう思います。

第二に、日本政府はその立場を特定の教科書の歴史観と一致していないし、支持もしていないと、明らかにしています。しかし、その教科書が日本の中学生の教科書として適切であると判断を下したのは日本政府です。これは、決して内政干渉ではありません。今、三十五項目の再修正を要求していますが、その内容は決して日本の内政問題ではありません。

これとの関連でひとつ大きな誤解があります。三年前に金大中大統領が「もう過去は問わない。未来に向かって行こう」と言つたのに、「まだ過去を言うのか」という批判なり、問題提起です。これはまったく逆です。三年前、金大中大統領の訪日によつてパート

ナーシップ宣言が行われた後、韓国のマスコミ、知識人、指導者から「反省しろ」とか「謝罪しろ」などと、過去を問題にしたことには一切ありません。それは事実です。決して韓国から過去を云々する問題提起はしておりません。たまたま四年ごとにくる日本の中学校の教科書検定の過程で、この問題が出始めたということです。

せつかくここまできた友好関係だから、少なくとも現状維持はしよう、このペースで二〇〇二年のワールドカップまで行けば、もう日韓関係は悪い方向へ逆戻りはないという確信なのです。これを乗り越えないと後退するのではないかという心配があり、その心配を共有しながら、できれば現状維持していくだきたいという願いでした。決して干涉とか、教科書問題への無理な文句ではありませんでした。

歴史認識を共有する——非常に立派な表現ですが、これはもう少し分析する必要があります。歴史認識はまず過去のファクトを確認する知的な作業が必要です。次に、その確認されたファクトをどう解釈するかという作業があります。歴史認識は、この二つの知的作業によつて構成されます。

学問的な事実の精査を

ありません。私は日本の研究者の良識、世界の常識を信頼しています。

教科書問題については、私は大使になる前から「どうすればこの問題を乗り切つて、両国の国民が友好的になるか」と悩んできましたので、私なりの歴史認識の意味づけがないと説明できません。解釈はそれこそ多様です。同じ日本人でも違う。韓国人と日本人とでも違う。その意味では日本政府が特定の教科書の歴史観を支持しないというのは、まじめに受け止めます。

しかし、過去を直視するということは確認された事実をありのままに認め合おうということです。解釈以前の問題です。われわれが問題にしているのは、まずそこなのです。もちろん過大な解釈は、歪曲になります。それも問題です。しかし、これは日本のアイデンティティーとか、日本人の誇りなどとは関係ないのです。まったくニュートラルなことで、事実が誤つていれば直すべきであるという次元のものです。

私も再修正要求をした三十五項目を大使としてよりも、研究者として、日本の友人として五回ぐらい読みました。まず、日本人の立場で読みました。私の四十年の研究者としての良心から言えば、事実の誤りはあります。それを大使が一つひとつ挙げるのは適切では

最近、金大統領は日本の与野党のリーダーに会って、「決して感情的ではなく、冷静に学問的に答えてほしい」と言っています。私は日本人、韓国人の知的レベルは高いと思います。教育度も高い。だから、再修正案を見れば、読めば、そして納得いけば、その意味をよく理解できると思います。ですから、この問題は合理的に考えれば乗り越えられると確信しています。

これに関連して一般的な話になりますが、私は歴史的事実がいかに大事かということを機会あるごとにランケを例にして話しています。実証主義の歴史家ランケは「歴史的な事実は書き換えるができない。その意味では神に通じる」という名言を残しました。私はそれを「歴史的な事実は砂の上に書いた文字ではない。風に消えたり、手で消せるものではありません」と表現しています。歴史的事実を無理に消したり、なくしたり、曲げたりするのは正当な道ではないと思っています。それぞれの国に歴史教育の問題はあります。それは認めます。一定の基準によつて、なんらかの検定を行つのも理解します。ただ、お互いに相手の国の人たちの立場を考えながら、われわれの三十五項目の提案について学問的に真摯に答えてくれればいいのです。それが大使としての切なる願いです。

金泳三大統領、細川総理時代も出発は非常に新鮮でした。細川総理の訪韓の時、私はソウルにおりましたが、韓国のマスコミで大変な評判でした。細川総理を批判するような記事はなかつた。しかし、その後いわゆる妄言や適切でない発言が日本から飛んできました。妄言と失言の悪循環で、日韓関係がまたたくダメになりました。こういう前例は繰り返したくないと思います。

皆さんもご存じのように、この三年間にもそういう適切でない発言がいくつかあります。しかし、韓国は非常に冷静に対応しました。私も現場で冷静に対応しました。韓国はこれまで歴史問題に対して自制しながら、相互理解、相互尊重の上に両国の友好関係を持つていいという問題意識ですので、それに相応するような日本の答えがあれば、私はこ

の教科書問題は乗り越えられると信じています。

次に文化交流に移ります。

交流は互いに学び合う限りないプロセス

日本と韓国の文化交流を歴史的に見れば、もう千四百年です。最近私が読んだ日本の文化人類学者の研究によりますと、韓国の人々が韓半島から日本に来るたびに日本の文化は発展した、飛躍したと書いてあります。これは文化人類学者の学問的な研究の結果です。古代にさかのぼつてみれば、韓国人が日本に文化的な損害を与えた記憶はありません。一九一〇年から三十五年間、言うまでもないことです。が、韓国の文化は破壊され、日本の文化が押し付けられた時期でした。

その長い両国の文化交流の経験を入れながらも、韓国は日本の大衆文化を公開しました。決断を下したのが一九九八年でした。皆さんは国と国との文化交流を空気のように当たり前に思うかもしれません、当時の実態からすれば非常に難しい決断でした。大勢の市民、国民が反対でした。

というのは、文化は単なる文化ではありません。文化産業の問題であり、経済力の問題です。日本の文化産業のレベルは高く、その

競争力は優れています。それに比べると、韓国はまだ未熟です。そういう中で公開すると、大変なことになるだろうという危機意識があつたのです。それを乗り切って開放しようと決断したのです。私はそのおかげで一日一人の往来の時代が開かれたのだと確信しています。三年間でこんなに変わらのかと思うほど変わりました。

文化というのは過去、現在、未来と長い歴史的な視野で見るべきである。韓国はかつて日本に対してカルチャーギバーの立場にありました。が、これからは日本に学ぼうということです。このように、文化交流

というのはお互いに学びあう限りないプロセスです。そういう長い視野で見ようと決断を下しました。幸い、日本映画の「ラブレター」、韓国映画の「シユリ」は百万人を超える観客が集まりました。昨年、日本で一年間に三百三十件ほど韓国関連の文化行事が開催されました。中には六十件以上の日韓合作の行事もありました。大変な進歩でした。

これからも文化は相互学習の過程として進めていきたいと思います。韓国と日本は儒教文化圏という同じ背景にあり、そこから自然に生まれる親近感は非常に貴重なものです。私もアメリカ、ヨーロッパなどに大勢の友人がおりますが、一番文化的な親しみを感じるのは、やはり日本人です。

サムライ文化と文士文化の相違

ところが、文化を受け入れるプロセス、方法、器、その中身は違います。その違いによって日本はサムライ文化で、韓国は文士文化の影響は、平均的な日本人と平均的な韓国人の価値観と行動様式の違いとなつて表れた。その違いは素晴らしいものだと思います。それはカヤグム（韓国の伝統樂器）と三味線の違いである。

私は最近、食文化の例としてビビンバを挙げます。日本人はビビンバを食べる時は、まずビビンバのいろんな要素を楽しむ。ところが韓国人は、これを必ず混ぜるんです。混ぜて、そこからエキスを出す。私はこれを「日本人は混在を楽しみ、韓国人は混合を楽しむ」と表現しています。非常に美しい違いが見えます。それが韓国人と日本人の個性であります。それが韓国人と日本人の個性であり、美学であり、文化のひとつのバターンになつた。だから、われわれは両国間のホモジエニティ（同質性）とヘテロジエニティ（異質性）を共存させながら、それを楽しむ。美しいじゃないですか。両国の文化交流は、これからもどんどん進んでいくと思います。

自由貿易協定への環境づくり

2001年7月23日 記録版 第106号

次は経済についてです。経済学者のサミュエルソンは、「経済は弱い花である」と言っています。土壤さえ良ければどんどん伸びる。土壤を良くする一番大きな要因は、政治的安定なのです。この前、江沢主席もそう言われました。これは、だれもが認めるキャッチフレーズです。政治的安定に基づいた経済関係です。経済は扱い手の営利な計算によつて行われるものですから、それは間違いありません。政治の方から妨害しなければ、どんどん伸びる本質を持っています。その意味で日本と韓国の経済は中長期的には決して悲観的に見ていません。ただ、経済外的な条件が悪くなると、経済も停滞するということになります。

幸い昨年は、日本の厳しい市場で、韓国のお商品が二百億ドル以上も売られました。これは、歴史上初めてです。日本から韓国への直接投資は二十五億ドル近くになり、こういう流れは止められないと思います。

特徴的なのは日韓、韓日の提携です。例えば、ボハン製鉄と新日鐵の提携が、良い例です。新聞でお読みになつたと思いますが、第4次携帯の提携です。ハンドホーンの通信方式の標準化に合意したというニュースは、I

FT時代における日本と韓国のイニシアチブを表すシンボリックなアライアンスです。こういったものが、どんどん行われている。

そこで、FTA(自由貿易協定)が、一番ホットなテーマになるのです。昨年、韓国の大統領と日本の総理大臣との間にもその必要性についてのコンセンサスが得られました。これは大体三つの段階で行われています。第一段階は研究者によるFTAの妥当性についての研究、第二段階はFTAのためのビジネスフォーラムの開催で、人選はもう終わっており、そろそろ始まると思います。これは研究者の研究をもとにして、実際にビジネスをやっている人たちが実務問題を議論しあう。その結果が望ましいものになれば、三段階目で政府レベルでの協議に進む。こういう順序になっています。

ですから、中長期的には非常に望ましい方向です。FTAはその前にいろんな条件づくり、環境づくり、すなわちブレ・FTA・メジャーズが必要です。さきほど一日一万人の往来があると言いましたが、その自由な往来のための航空便がまだ足りない。どんどん増やしていくかなくてはなりません。物の交流、制度の整備、人間の交流を拡充する必要があります。

次は南北関係について、私なりの説明をします。われわれはエンゲージメント・ポリシーの公式的な表現を包容政策と呼んでいます。この政策は、歴史に残る選択だと思います。実は賛否両論はあります。しかし、外交政策や政治的なディシジョンに対する評価というのには、賛否両論があるほど意味がある。芸術への評価は尊敬一本ですが、政治的なディシジョンは常に賛否両論がある。要するに賛否両論に値するポリシーは意味があると考えています。

韓國の大統領が自國の問題解決の方法を考え、アジアや世界の平和に貢献できる政策を出したのは、韓国の歴史上初めてです。それが世界から認められている。その包容政策に

本のFTAには経済外的な要因も大事です。信頼の深化というか、これまでの二年間で積み重ねて来た関係、ベースでいいと思います。

これが、例えば教科書問題などで停滞してしまうと、FTAの環境づくりに障害となるのではないかという心配もあります。両国のリーダーが賢い判断をして真剣に話し合えば、いずれ乗り越えられると思っています。

包容政策の持つ歴史的な意味

基づいて結論を出したのが、昨年の南北首脳会談だったのです。

首脳会談の意味を、私は三点で説明しています。第一は冷戦の終焉です。一九四七年、トルーマン・ドクトリンによつて世界的なレベルの冷戦が始まりました。韓半島は、一九四五年直後からすでに厳しい冷戦状態でした。私はその冷戦の現場で生まれて育ちました。その犠牲にもなりました。トルーマン・ドクトリンから始まつた世界的な冷戦は、韓半島の冷戦が終わることで、すべて終わります。少なくとも昨年の首脳会談は、地球上最終の冷戦の終焉を感じさせるのに十分でした。冷戦というのは、本当に悪魔の言葉です。韓国人にとって、冷戦は悲惨そのものでした。家族の分散、国土、民族の分裂。個人の意識の分裂まで引き起しこし、本当に厳しかつた。だから、韓半島の冷戦を終わらせるることは、世界史への貢献にもなる。

第二は民族自決の表現です。韓国は白国の政治的な運命を自らの力で決定したことはあまりありません。あまりにも大きな隣の国の利害関係におおわれ、非常な外圧に強いられた歴史を歩んできました。分断もすべて強制されたものです。首脳会談は冷戦そのものを自らの力で解決しようという意志の表現だつたと思います。

北では「自主性」という言葉をよく使っています。強制された分断や冷戦を自分の力で乗り越えようというコンセンサスは、南北のリーダーにありました。決して狭い意味でのナショナリズムではありません。韓半島の問題は民族の問題であると同時に国際問題です。民族問題であるから、北と南の当事者は哲学を持ち、ビジョンを持って解決しなければなりません。また、国際問題ですから、韓・米・日三国共助と中国・ロシアの協力が大事です。

第三は、平和共存の制度化の始まりです。これは一番現実的なアプローチです。冷戦によって分かれた国解决问题、冷戦の越え方を見ると、ベトナムとドイツのモデルがあります。ベトナムのモデルについては、韓国人はすべてノーです。ドイツのモデルは平和的な手段という意味では大賛成ですが、今の北は統一前の東ドイツとは違うし、今の韓国の経済力などは当時の西ドイツとは比べものになりません。

では、どうするか。なんらかの形で韓国モデルになると思います。少なくともコリアン・モデルの実践のためにには、最少限、平和共存の制度化が必要である。それが昨年の首脳会談の意味でした。これは世界的に支持を受けましたが、ブッシュ政権の登場とともに

いろいろ言われました。食い違いがかなりあるように誤解されたりしました。私は包容政策の原則に基づいた南北関係、北の選択という観点からすれば、北は変化を選択せざるを得ないと思います。北にとって、変化は避けられない。周辺に良い『教科書』はある。ベトナムがあり、中華人民共和国もあるのです。それをよく見守りながら、北朝鮮なりの変化を望むでしょう。

変化は容易ではありません。自己変化能力は大事ですが、それが足りなければ周囲が協力し合つて変化を誘導し、国際社会のメンバになつてほしいというのが、包容政策に基づいた対北政策の根本です。ブッシュ政権も包容政策の原則や方向性を認めています。ただ、北が本当に変化したのかという観点で、少し説明の方法やスタイルが違うのは認めます。

韓国、米国、日本の三者協力が軸

変化をどう見るかということについて、ファンダメンタリーに変化がないという表現をよく聞きますが、これはあまり適切な表現ではないと思います。政治の世界ではファンダメンタル・チエンジはありません。戦争と革命でさえファンダメンタル・チエンジ

は難しいのに、それ以外の方法でファンダメンタル・エンジはあり得ない。変化というのは徐々にいかざるを得ないと思います。五年前の北と今の北を比べて、変化がないと言う人は一人もいないでしょう。変化とは、そんなものです。

ブッシュ政権は検証というのを非常に大事にしている。そのブッシュ政権の対北政策と我が政府の包容政策は決して矛盾していない。相互補完できるし、収斂は可能だと信じています。いろんな良いサインが見えていましたし、たとえ意見の食い違いがあつても、それを乗り越え、話し合いで解決するのが外交です。まずは韓国とアメリカの問題であり、そこで日本の役割も大事になってしまいます。今こそ、韓国と日本、アメリカの協力が最も大事になつてくるのです。

日本と韓国、韓国と日本の間には千四百年にわたる交流があります。今、地球上に存在する二〇〇ぐらいの国の中で、これほど長い関係がある国は希です。西洋でも中世の一千年を除けば、日韓のような関係は見当たりません。日本の歴史家は「日本人が外国として最初に認識した国は朝鮮である」と言っています。こういう国が共同作業すれば、シナジー効果は非常に大きいというのが、私の信念です。私は日韓共同研究の韓国側のチーム長と

して延べ三百五十人ぐらいの韓国と日本の歴史、政治、経済、文化人類学の研究者と交わり、その成果を出しています。また、研究の成果は日本語、韓国語、英語で翻訳されます。

二〇〇二年のワールドカップは韓日両国が天から与えられた最大規模の総合的な共同作業そのものです。単なるスポーツの共同作業ではありません。日本も韓国も十六強に入つてもらいたい。日本は入るんじやないかと思います。できれば、両チームとも十六強に入つてほしい！

堺屋元経企庁長官は「競争」というおもしろい言葉を使いました。スポーツは競争しながら楽しむものですね。本当に素晴らしい機会だと思います。ワールドカップに関連して数え切れないほどの文化事業も準備されています。音楽もたくさんあります。音楽もきょうう樂なのですが、この場合のきょうは「競」ではなく、「共」です。音楽は競争せずに興奮するんですが、スポーツ以上の効果があると思います。

民主主義と市場経済という普遍的な価値を共有している日本と韓国の共同作業ですかね。それが他のアジアへのメッセージになるという意味も大きい。延べ四百億人という人間が見ると言いますから、西洋に対する新鮮

春名幹男（企画委員・代表質問） まず、小泉純一郎首相を韓国側はどう見ているかをうかがいたい。

大使 私の体験から始めます。私は二度小泉先生に会いました。確か八年前の大学教授時代だったと思いますが、ビジョンを持つている一人の日本の政治家と紹介されて話し合つたことがあります。次は総理になる前の三月だったと思いますが、四十五分ぐらいお目にかかりました。

私の印象は三つです。一つは改革意識の強い方という印象。二番目は率直な方だということ。三番目は合理性のある方で、合理的にものを話せば納得してくれる。そういう印象でした。

最近、韓国のマスコミは教科書問題との関連があつて、日本の右傾化という形で日本のリーダーシップを評している面がある。私は

なメッセージにもなる。そのメッセージのシナジー効果は実に大きい。私は大使として滞在している間、両国の友好のために私のすべてを投じて頑張っていきたいと思います。よろしくお願ひします。

質疑応答

右傾化という言葉はあまり使いません。日本はもともと右翼じゃないでしようか。一八六年の明治維新以来、日本ほど保守的な国はありません。だから、保守化という言葉は使いたくない。保守国家を保守化するつて、どういう意味ですかね。

大正十三年も立憲民主主義、平民總理と唱えながら、やはり帝國主義でした。当時の理念である立憲民主主義が帝國主義のイデオロギーとしての役割を果たしていました。戦後七年間の占領改革も軍国主義改革という意味ではラジカルでした。しかし、反共、共産主義を防ぐという意味では保守路線でした。

「日本の農地改革は、最も有効な反共政策だった」とマッカーサーは言いました。

占領時代、社会党が二度政権に入りましたが、社会党も占領の保守体制を変えることはできませんでした。村山総理も、もちろんそうでした。日本の政治の官僚依存度は村山政

権の時の方がもつと高いという研究結果もあります。要するに約百三十数年間、保守の基調が守られてきたわけです。イギリスでも労働党、保守党があります。アメリカも共和党、民主党がある。他のヨーロッパはほとんど社会民主主義、民主社会主義です。それに比べれば、善かれあしかれ、これは日本の特質であり、特に冷戦後の反共保守主義という意味

では、時代精神にも合っている。

春名 それに関連して靖国神社の公式参拝問題があります。この点については、どう思われますか。

大使 教科書問題もそうですが、基本的に日本人の選択です。日本人の自己認識が問題です。世界第二位の経済大国にふさわしい政治的な責務を果たしてほしい。その役割を果たすためには、少なくとも隣国の信頼を受けなければならない。日本の脱亜論は一時

本の近代化の過程でとった政策として成功した例ですが、私は日本は歴史的にも文化的にもアジアから脱することはできないと思います。ですから、韓国をはじめとする隣国からの信頼に憂慮を与えるような選択はしてほしくない。これが、私の見解です。

春名 田中真紀子外相の印象をうかがいたい。大使は田中外相が最初に公式に会談された外交官です。どう印象を持たれましたか。

賢君の話を私の方から出しました。すると、大臣の目が潤んだんです。情の深い人だなあという印象を受けました。もう一つは四十分ほど話しているうちに、「演じて説く」わざとでも言いますか、本当に切れ味の鋭さを感じました。こういう切れ味が国民大衆の人気を得る原因になるのかと思いました。

大使 これは日本の自己認識、選択の問題だと思います。三十五項目を今、精査していると専門家が集まって精査しているから、私は解釈の多様性を認めながら、同じ専門家、研究者、知識人としての共通項は出ると思います。その基準で見ても、明らかに事実の誤りはあると思います。また、それ以外の解釈の面でも韓国でいう歪曲に当たるものは、日本の専門家が読めば、その意味が分かることではないでしょうか。

春名 田中真紀子外相の印象をうかがいたい。大使は田中外相が最初に公式に会談された外交官です。どう印象を持たれましたか。

春名 天皇陛下の韓国訪問は金大中政権下で実現する見通しはあるのでしょうか。

大使 一つの世論調査に過ぎませんが、三

大使 これは予想外の質問です。二つ、深い印象をつけています。

最初、例の地下鉄の事故で亡くなった李秀

年前、天皇の訪韓に賛成したのは六四%でした。昨日の世論調査によると、五九%でした。五%ぐらい落ちましたが、それほど大きな問題ではありません。教科書問題が真摯に話し合われて解決できれば、また六四%以上になる可能性があります。すでに韓国政府は天皇、皇后両陛下への招待をしておりますので、いつでも歓迎できる準備をしています。その時期の選択、状況判断はすべて日本政府に任せています。

重村智計（毎HOB） 大使とは長い付き合いですから、難しい質問をいくつかさせていただいて歓迎したいと思います。一つは教科書問題。ここまで大きく混乱するにあたつて、大使の対応にも責任はなかつたんだろうかという意見がソウルでは出ている。たとえば毎日新聞が韓昇洙外交通商部長官にインタビューした際、大使が韓国民の意思、感情を日本側に伝えるのをかなり怠った、弱かつたというような発言をなさつた。そのへんについて率直なご意見をうかがいたい。

二つ目は日韓の共同研究をたくさん学者を集めていますが、教科書問題が大きくなつたり、「新しい教科書をつくる会」の人たちが別の教科書を作つたということは、その共同研究の成果がなかつたということなの

か。あるいは他にやりようがあつたのか。それに関連して日本と韓国がお互いに直接論争しないで代理戦争みたいになつていて、新しい教科書を作つた人たちを韓国に呼んで、韓国の学者と直接論争してはいかがでしようか。

それから大使は、日本も韓国も民主主義の共通の理念を持つている国だとおっしゃっている。しかしながら、これによると、韓国では政府に批判的な新聞の記者の銀行の個人口座を調査するようなことが行われている。弾圧ではないかという指摘もソウルでは出ている。これについて日本のジャーナリストは非常に関心があるということをソウルにお伝え願えないか。

大使 私が答えられる難しい質問もあれば、答えられない難しい問題もある。教科書問題では一部では中国と比べられた。中国大使はさつそく記者会見して批判したのに、韓国大使は黙つていた、ということも含めてです。

当時、休みもあつたので二日ぐらい時間をかけました。すでに韓国の韓昇洙長官が「遺憾」という声明を出しました。私はなぜ「遺憾」なのかを説明するのが現場の大使の役だと思ったのです。それで時間をかけてすべ

て読みました。少なくとも二日かかりました。それから二つの具体的な批判をしたんです。一つはその教科書が教科書として適切であるという判断責任からは自由じやないじやないか。第二はだれが読んでもハートナーシップの三つの精神に反する、あるいは後退していることが分かる。大使としては具体的すぎるほど、きちんととした見解を持って私のパートナーに会つて意見を伝えました。

最後の質問については実態を知らないので答えられません。税金のことはソウルにいても分からぬし、まして東京にいる私に聞くのはどうかなと思います。

共同研究は政治、経済、文化、日韓関係など七つのカテゴリーに分かれて各五人ずつ十人、計七十人前後の学者が八年間やってきました。その結果はほとんど出版されています。これは教科書ではなく、濃度の高い学術論文です。いうならば一般出版物にあたります。それを読めば、確認されたような事実はすべてまとめられている。問題なのは教科書として政府が承認したからであつて、一般出版物なら、こういう問題は出ないと思います。

（文責・編集部）

■二〇〇一年六月六日（水） 昼食会

集団でなく個が動き出した

堂本 晓子

千葉県知事



実は自分の選挙観も汚れてた

三月の選挙で、政党や組合などの組織からの支援をまったく受けず「完全無所属」で戦った。自ら『古巣』と称する当クラブで、無党派知事を生んだ今回の選挙戦の特徴と、知事就任後の思いを、豊富なエピソードを交えて語った。

私はTBS時代、日本記者クラブのメンバーに長いことしていただきしていました。OBになつたらこんなにいい場所はないから、大いにクラブを使わせていただこうという魂胆で、実はメンバーになつていたんです。が、国会議員に立候補した途端に内規でダメです、ということで、やめることになりました。おかげよう、こういう形でお招きをいただくような日が来るとは夢にも思っていませんでした。

千葉県担当の若い記者の方々もみえていら

っしゃいますが、私がその方々ぐらいの年齢だったときに、一緒に特ダネを追いかけた仲間の方たちのお顔もあちこちにあるものです

から、とても懐かしく思っています。よそのところへ来たような気がいたしません。

お招きのお話をいただいたときに、ぜひマスコミの方々に、今度の選挙のことを正確に知りたいという気が強くいたしました。

資金はあるのか、連合はつくのか、民主党はどういうポジションなのか——。最初のころは盛んにそういうことを気にしていました。長野では田中康夫さんに連合長野がついていましたし、財界もついていた。でも、私のところにいらした千葉の方はほんとに何もない市民運動のオーブズマンやNGOの人たち、奥さんたちなんです。これで果たして選挙ができるのか。そういうことを初め

TBSの「テレポート6」を担当していた二十年前に、私は二年ほど千葉を担当しました。千葉の金権選挙華やかなりしきるでした。ほぼ千葉県全域を歩きましたが、中心はかつての二区というところの取材でした。そのときの金権体質のすごさ。それには実際に驚きました。宇野亨さんが逮捕されたときでしたから、まさにそのピークであつたわけです。

保守王国、しかも金権千葉といわれるようなところで、果たして無所属の候補が当選できるのか。それが私の最初の疑問でした。それから、二度参院選に出ていますので、選挙については、自分の心がといつたらいいかもしませんが、手アカに汚れていたと、今になつて思っています。

資金はあるのか、連合はつくのか、民主党はどういうポジションなのか——。最初のころは盛んにそういうことを気にしていました。長野では田中康夫さんに連合長野がついていましたし、財界もついていた。でも、私のところにいらした千葉の方はほんとに何もない市民運動のオーブズマンやNGOの人たち、奥さんたちなんです。これで果たして選挙ができるのか。そういうことを初め

は思つていました。

でも、その考え方を変える要因が、私の中に二つありました。

私は、十二年間の国會議員のうちの四年近くは連立政権の中の与党側でした。しかも、一年半は橋本政権の中で、さきがけの党首という立場で政治の中枢にいたわけです。橋本内閣は、行財政構造改革というのを掲げて六つの柱をたてていた。

私も、みどりの行革と、男女共同参画社会基本法の制定を大きな柱にして活動していました。医療改革、福祉の問題にも深く関与していましたし、相当張り切って仕事をしていました。例えば介護保険法、満足はしていませんでした。例えは法律はできた。にもかかわらず、自社さの連立が終わって、次の自公連立ができた途端に、これが法治国家なのかしらと思つたのですが、一日でもつて法律で止めてしまふ。これでは何のためにあれだけの時間をかけて一つの法律を国として制定したのか分からぬ。一体何をやつていたのだろう、という思いがとても強くなつていた。それが要因のひとつです。

そしてその間、知事選で高知の橋本知事が始まって、宮城、東京、そして長野、栃木と無党派の知事が誕生していました。それで、やはり地方から変えるしかないのかな、とい

う思いがあつて、どうしてもノートと言い切れなかつたところがあつたのです。大変に悩みました。

これが二つ目の要因と関係するのですが、私のよく知る方たちが知事として華やかに活躍していた。TBS時代のベビーホテル・キンペーンのときから親しくしていただいていた浅野さんが宮城県の知事をしていらしました。それから、衆議院議員だった北川さんが三重県の知事になつておられた。

「完全無所属で戦え」のアドバイス

まず宮城の浅野さんに電話をしたら、とにかく結論を早く出さない方がいいとアドバイスされました。そうすれば、自分が本当に知事としての仕事がしたいのかどうかがはつきりしてくる。それから、相手が本当にあなたを立候補させようとしているのかどうかもはつきりしてくるとおつしやつたのです。まさにそれはピタッと当たつていました。

でも、それよりももっと大事だつたことは、どこの政党からも、どこの組織からも支援を受けない形で選挙を戦うことだ、それは知事になつたときに違う、とおつしやつたんです。浅野さんも二度日の選挙のときに、いろいろな政党や労働組合が支援したいというのをあ

えてお断りになつて、完全無所属で戦つた。その経験から、そういう戦い方をして初めて何のしがらみもない知事になれるのだ、ということを強くおつしやつたんです。

人の気持ちというのは不思議なもので、そこでだんだん変化していくんです。日本の国を変える、という大上段に構えた思いから、やはり千葉県という県にとつてどうなのか、という選択に自分の気持ちが大きく動いてきました。

かつて二十年前に私がジャーナリストとして見た千葉を、ほんとに変えられたら、日本が変わるんじやないかと思ったわけです。千葉は日本の縮図であることに間違いありません。善しにつけあしきにつけ、日本の高度経済成長を支えた産業のあり方など、千葉のありようというのはそれを反映しているわけですから。

加えて、これは大変に個人的な問題になるんですけども、私の母方が千葉県の里見という家の出だつたものですから、しまいには、ご先祖が呼んでいるのかな、という気持ちになりました。子供のときから九十九里の浜辺で遊んだりしたものですから、県知事という重い職責をもつて、愛情を持ってかかわれるかどうかということを考えると、何か理屈にならない部分で千葉に対する思い入れ

が、私の中にあつた。

何の支援もない形で戦う選挙ということ
で、相当無謀だつたとは思います。相当めち
やくちゃな決心でした。

私もマスコミ出身ですから、こういう選挙

をすることにしたので取り上げてください
と、週刊誌の方にも、新聞、ラジオ、テレビ
の方にも随分お話をしたんです。が、関心を
示してくださる方は非常に少なかつた。です
から、長野のように事前に風は吹かなかつた。
むしろ、私はメディアではいわゆる泡沫候補
以外の何物でもないんだな、ということを実
感しました。

実際に選挙が始まつてからも、まず資金は
ない、事務所もない、組織もない、責任者も
いない。何もかもない尽くしだつたんで
す。まず考えたことは、事務所を借りなきや
ならないと、いうことでした。でも借りるのに
お金がない。それではみんなで持ち寄りまし
ようということになつたわけです。なげなし
のお金だと思うのですが、主婦の方たちが十
万円ずつ出したりして、皆さんにお金を集め
て、まず権利金を何とか手に入れる。そんな
話からでした。

お金は全部、ボランティアとカンパでやる
ということでスタートしたわけです。選挙を
始めたときも、相当勝手連というのはできて
いたということです。北海道から沖縄まで、

きつありましたが、それは小さな点でしか
なかつたわけです。

威力を発揮したインターネット

ただよかつたと思っているのは、国会議員
として、いわゆるインターネット的なものを
使い始めたのは、多分私が最初だつたと思う
んです。たまたま好きなスタッフがいて、国
会議員としてホームページとかeメールなど
をずっと出し続けていました。これをすぐ切
り替えてフル稼働することが、可能だつた。
ほかの候補の方は新しくそれを立ち上げて
も、結局はうまくいかなかつたように見受け
られました。

長野もそうでしたけれども、千葉の場合も、
二つの部分で、それを稼働することができた。
一つは県内です。県内の人たちにホームページ
で、ボランティアを申し出てくださいとか、
勝手連をつくつたら、とにかく責任者の名前
と住所だけを登録してくださいと呼びかけた
わけです。勝手連は「一人いれば認めます」とい
うことで、一日に十ぐらいたつでいいました
んでしょうか。全県でできていつた。

でも、もつと強かつたのは、私が参議院の
比例区だつたので全国規模の名簿を持ってい
たということです。北海道から沖縄まで、

「こういう決心をしたので、皆さま、ご支援
ください」ということで出したのです。県の
方にはあまり申しあげてませんが、実際にカ
ンパが集まつたのは、むしろそういうた全国
規模の方たちからでした。

そして、その方たちはカンパを出すだけで
はなくて、千葉県のお知り合いに、一生懸命
手紙を書いたり電話をかけたりしてくださつ
た。だから、ある時期になつたら、学校の友
達、職場の上司、親戚と、何の脈絡もないと
ころから、たとえば北海道や他のところから、
「みんな、あなたに入ってくれと言つてくる」
というような人がだんだん増えてきた。

そういう意味では、長野、栃木と続いた
流れをここで切つてはならないという、日本
全国のある種の市民選挙の流れというような
ものがあつたのだと思います。書き下ろしで
そのときのことを本に書くほどの時間はない
んですけど、あちこちで対話集会をやつたので、
そのテーブルを起こして、今、本にまとめてい
るところです。そのテーブルを聞いてみますと、
一つの流れというか、渦ができるいくプロセ
スを今止めたら大変だという全国規模の問題
意識を持った市民たちと、千葉県内の、何と
しても千葉を変えなければならないという問
題意識を持つた県民たちが、二つの層になつ
ているのがとてもよく分かります。

私は吹かなかつたが渦ができた

いざ出陣という公示日には、ふと見たら、「ネット北海道」という旗を持つて、北海道から三人も応援に来ている。東京はもちろんですが静岡、新潟、長野、神奈川といった各県からものぼり旗を持って、自分の県の名前を書いて来てくださっている。私はとても驚きました。

みなさん勝手に来て、事務所に泊まって、

三日なり四日なりボランティアをして、各县に戻っていく。純粋に応援に来ましたという方と、自分たちもそういうことを起こしたい、については千葉がどう戦うかを偵察というか、勉強しに来たという方もおられた。実際に、自分のところに帰つて市長選をやっていますとか、知事選をやっていますという方もおられます。特に都議会議員が多いのですが、この後それぞれ千葉から散つていって、逆にそれをパワーにしておられる。これはなかなか現場にいないと分かりにくいことなのです

ですから、風は吹かなかつたけれども、非常に確実な渦が巻き出した。そういう手ごたえを感じたのは、選挙も中盤に入つてからでした。

私は公示日に、「演説はやりません、対話でまいります」ということを宣言しました。ですから、いわゆる街宣車の上には「回しかのつてない。それは、県庁前に行つたときに、下だと見えないのでのつただけで、あとはビル箱より高いものにはのらなかつたわけです。原則として、自分の足で歩いた。そして、これはTBSにいたおかげなんですが、マイクを持って、「あなたはどういうことを県政に望みますか」ということで、対話集会を七日間重ねて行つた。

そのやりようを、メディアの方が取材して

報道する。すると、途中から電車に乗つていける方が手を振つてくださつたり、エスカレーターですれ違いざまに「堂本さん、頑張つてね」とか、声がかかるようになつてきたわけです。あ、これは手ごたえが出てきたな、と感じました。

恐らくそれは、メディアを通しての情報と、全国から集まつてきたハガキとか電話とか、そういうものの刺激によるのだろうと思ひます。しかも、それは非常に個別的なものでした。

というのは、私の対抗馬として自民党の候補と民主、社民、連合の候補と、共産党の候補と、典型的な政党候補があつたわけです。自民の方は二百八十幾つとおつしやつていた

と思いますが、業界団体に最後の追い込みで電話をかけまくつていていうのを新聞で読みました。ところが、二百あろうが、三百あろうが、業界団体にどんなに名簿がたくさんあるが、それがもう崩れてしまつていただけですね。個々に分解してしまつていて。

私たちを「砂」と言つたんです。最初は、「風が吹かない」とか「渦」という言葉を使つていたんですが、最近は、本を書きながら、「磁石」という言葉を使うようになつています。

一粒一粒の砂を対象にした選挙戦

結局、レンガのブロック——これは権名誠さんと対談したときに出た言葉ですが——日本中、今までにはブロックを積み重ねる選挙だつた。だから、レンガだつた。例えばそれが業界団体だつたり、自治労であつたり、組合であつた。そういう名簿を当てにして、レンガを積み上げることによつて票を計算した。ところが、私たちの選挙は、レンガではなくて、レンガを構成する一粒一粒の砂を対象にしたものだつた。ですから、ボランティアじやなかつたら、この選挙はできなかつたと思ひます。

日本中から寄せられる個人の名簿ですか

ら、整理したり重複を省いたりするのに膨大な手間がかかるわけです。それをボランティアの方たちが、選挙事務所で、みんな黙々とやつてくださった。集まってきた名簿を整理して、一つずつ電話をかけていって、それを積み上げていったわけです。

ですから、立候補はしたけれども、この選挙の手法は勝てないだろうというのが、今までの既成の政党の常識です。私自身も初めはそう思っていました。けれども、結局、それが結果としては非常に科学的、統計的、それから堅実な選挙の手法だつたわけです。

個別的大だからこそ、それが政治を動かす。もしかしたら、自民党の小泉総裁が選ばれたことにも、この流れはある種の影響があつたかなと私は思うのです。そういう構図から見ると、似ているんですね。どこの派閥というところではなくて、みんな、それから離れて一人の人を応援するというふうに動いて行つた。

テレビの番組に出たときに、私は非常にびっくりしたんです。自民党は千葉の知事選を終えた段階ですでに、緻密に選挙分析をしていらっしゃいました。むしろ野党の方が研究していなかつた。「自分の分析だとこうだけど、どうかなあ、堂本さん」と言つて、自民党の中堅の国会議員にそれを見せられたんで

す。ああ、自民党はこういう研究をするんだ、とつくづく思いました。自民党はなぜ千葉で私が勝つたかということを、相当正確に把握しておられたと思います。

では、このことが知事のポジションとどういう関係があるかと申しますと、全部砂だつたわけですから、どことの「しがらみ」もないわけです。もし二百八十の業界団体にお願いをしていれば、政策を立てるとき、予算を立てるとき、全部、その団体に気を使わなければならぬ。あるいは政党の支援を受けていたら、その政党の綱領なり主義主張等を気にしなければならない。ところが、全然それがなかつたわけですね。

あげくの果てに彼女や彼らは大変スマートでした。「県民の会」というのをつくつたんですが、選挙が終わつた途端に、今度は自分たちがしがらみになりかねないからと、あつという間に解散式をやって解散しちやつた。これは大変スマートだと思います。

よその県の方から、千葉県民がそんなに成熟していたとは夢にも思わなかつた、というふうに言われました。私は長野県に住んでいたんですが、長野の方から、もし、自分たちがもう少し千葉県民のような成熟度を持つていたら、堂本さんをむしろ担いだかもしけないと言われました。

というのは、田中康夫さんに声がかかる数日前に、私も出てほしいということが長野であったのです。が、長野県は田中康夫さんを選んだ。千葉県は堂本暁子を選んだのです。今になって、長野の方が、千葉の選挙のありようをご覧になつて、「千葉はああいう選挙を戦うことが可能だつた。千葉の方がそういう意味では成熟していただんだ」という感想を最近述べられているわけです。

選挙費用は二千万円で足りた

ですから、今は何のしがらみもありません。カンパも、私は涙が出そうでした。子供がカンパ箱のところに一円玉を持ってきて落とすんですね。そうかと思うと、サラリーマンがお財布を開けて一万円札を入れる。箱は普通のボルト箱なんですが、その中に十万円というケタで道端でカンパが入つていく。これは大変なことです。

ゼロからスタートしましたけれども、終わるまでに二千万円集まりました。でも、全部ボランティアなので、必要経費は千四百万ぐらいだつた。千五百万あれば全部まかなえる選挙でした。千葉の選挙は常識で言えば二億円、多く使う場合は二十億円かかると言っている。それが、たつたそれだけで済んだわ

けです。

私たちにとつての唯一の武器はビラでした。ビラというのは、団体に届くのではなくて個人に届くものです。ですから最後に、もう一回だけ個人に届けようということで、残っている六百万円ほどのお金を使って、新聞への折り込みビラを東葛地区を中心に出しました。これが、最後のお金の使い方です。とい

うわけで、二千万円を全部使い切りまして、会計報告も全部オープンにしました。

そういう形ですから、予算の編成をするに当たつても、どこかに気を使う必要がない。

今、ちょうど補正予算の時期です。九五%までは沼田知事のときに決められておりましたから、私には5%の余地しか残っていませんでした。でも、5%といつても千葉の予算構があるわけです。だから、5%より多くなりましたが、一〇%近く、百七十億円近い予算をこの間つくったのですが、公約で話してきたことをそのまま実行しました。

例えばNPO。額は少ないので、理想的なNPOの法律を、私は国会議員時代に三年間かかつてつくりましたから、それをやる。それから、国會議員をやめるときに、ドメスティック・バイオレンス（DV・女性に対する暴力）の法律をやりかけでした。日本中

のそうした暴力を受けていた方たちから、「私たちを捨てるの？」と言われたものですから、とてもつらかったです。「いや、そんなことない。千葉で理想的なことをやるから待つて」と申しあげました。

「しがらみ」なしからこそできたこと

いざ千葉県へ来てみると、残念ながら、千葉は婦人相談所がほとんど機能していません。婦人相談員はいることはいたんですね。それで計算すると、千葉は十七人いていいはずなのにいなかつた。NPOの政策とか、いわゆる市民の側からつくり上げいく政策とか、女性の政策とか、そういう言葉としてはあるんですが、実質としてなかつた。つづく女の知事になつてよかつたなと思つたぐらいです。

しかし、ボテンシャリティはすごくありました。私がDV関連のことをやりたいと言つたら、松戸とか野田などいろんな市から県がやつていないので困つていた、という声があつという間に上がつきました。やはり、市町村ではやつているんだなと思いました。

それから、おととい、自分が法律をつくつたというので、県庁の中の多目的ホールで、DVの法律の本質ということで講演をしたのです。県庁職員に、男でも女でもいいから聞きに来てくださいと呼びかけたわけです。百人ほど入るところなので、五十人ぐらいは来てくださるかなと思つていました。

そうしたら、何と三百人以上いらつしやつた。こういうふうに県の職員は望んでいました。どうな、ということをすごく感じました。作文を書いてもらつて、その中から専門にやる職員を選んで、知事直轄でプロジェクトを開いていきます。警察も裁判所も全部関係しますので、ダイナミックな展開をやつていきたいということでやつたんです。

これからは環境だろうが、障害者の問題だろうが、予防医学の問題だろうが、道路の建設に関してのビジョンとか、成田の問題も含め、私は月に最低一回は県庁の人たちと政策論議を続けていこう、という気になつているところです。

そういうことで、完全無党派の選挙を戦つたから、大変自由な、独立した、県民のことだけを考える県知事になり得たということです。政党政治を標榜する必要のある政治の構造あるいは選挙になると、ちょっと違うかもしれません。しかし、首長というのは本質的に、その県の人のため、あるいは市のため、町のため、村のための行政をやるわけですか

ら、そこでは、こうしたことがとても大事だということです。

行政の長と県民代表の二面性

同時に、これも浅野さんに言われて自分で非常に大事にしていることですが、そういう形で選ばれた場合には、行政の長であるというポジションと、それから県民の代表であるというポジションと、その二面性を併せ持っているということです。今、そのことで私の中で言い聞かせてているのは、情報公開の問題です。

私自身の情報はもう公開することにしました。いわゆる交際費もホームページ上にも公開しています。しかし、オンブズマンから前の知事の交際費についての請求が出ているわけです。これをどうするか。当選してから議論もしてきたわけですが、行政の側の立場を大事にしながら、一方で県民の代表であるというもう一つの側を大事にするということです、これから決断をしていく段階に入っています。

半端なことはやりたくないと思つています。ジャーナリスト出身で、国会で情報公開法を少なくとも自分で手がけて成立させた人間として、いざ知事になつたときに半端なこ

とをするというのは許されない。

地方分権の問題ですが、これは中央から見ているのと地方から見るのは何と違うことか。地方分権一括法で権限の委譲はなされていらない。

実際に県の予算をはじめて分かつたのですが、県税のほとんどは義務的経費といわれる国が決めている学校の先生の給与や、警察官の給与などでほとんどなくなってしまうんです。それ以外残されているものは補助金と地方交付税だけ。補助金もある種、中央で決めたことをやるわけですから、これも相当中央の意思が入つてくる。そうすると、知事の裁量でできる財政的なことの何と少ないことか。

ですから、ここは大いに知恵の出しどころなのです。最近、二度ほど関東の一都八県（長野県を含む）の知事の集まりがありました。そこでも、地方交付税の一割カットが話題に出ました。非常に強い抗議が出ました。そういう知事側の声はどんどん上がつてきています。地方分権の審議会を続けることは決まりましたけれども、その中で財源の委譲をどうするか。これがほんとの意味での地方分権が実現するのかどうかにとつて大きな課題になつてくると思います。

補正予算を組んで実感したこと

最初に申し上げた中央の政治、あるいは日本そのものありようを地方から変革できるのかとの課題は、まさにこの辺にかかるところではないだろうか。それは単に長野や、栃木や、千葉で私のような選ばれ方をした市民派の知事が出ただけではダメなんですね。

二十一世紀の価値観とでも言つたらいいのでしょうか。この十年間、私は国際的な場面で、そうしたパラダイムシフトの現実を見てきました。ベルリンの壁が崩壊したときもようどベルリンになりました。いわゆる東西の冷戦構造から、そうではない、人間安全保障の時代という言い方でもいいでしょう。むしろ地球規模問題が環境や人口の問題で新しい局面を迎えた。地球規模の大きな価値の転換と言つていいでしょう。国家よりも住民の主体性、あるいは個人、地球市民という言葉を使つてもいいのかもしれません。どういう言い方をするにしろ、個人の権利に立脚した考え方で世界が移行していつているわけですね。そうした中で、一方でグローバライゼーションが進み、情報も、金融も、物流も、そして人の流れまでがグローバライズされた。

その中で、日本の政治は、何かギューッと鉄の棒が、日本列島に刺さっているように、古い体質が残っている。国會議員として感じていた以上に、今は千葉県の知事として強くそれを感じています。

そうした中央集権的なもの、政治家として変えよう変えようと努力をしたにもかかわらず本質的に変えられなかつたもの、それを補正予算に関与してみて初めて、見えてきたわけです。これが日本なんだというのが分かつたんです。

今日お配りした千葉県のパンフレットを見ていただければ分かります。千葉ということを知つていただくためのパンフレットで、前知事のときにつくられたものなのですが、これをご覧いただくと、やはり建設が主導だということは一目瞭然です。言葉ではほかのこととも入っていますけれども、どれだけ多くの建設の事業をしてきたか。

ただ沼田さんは相當に善政を敷いたともいえる。当時だつたからできたのですが、相当社会資本を残したという観点に立てば、そういうことも言えるかもしれません。けれども、一方で、福祉などのソフト面、あるいはこれらのインフラに関しての人材の投入、あるいはソフト面での知恵の集積といった面ではちよつと立ち遅れてしまったのではないか。そ

こまでのダイナミズムを持ち切れなかつた。あるいは国際的ダイナミズムは持ち切れなかつたのかなと思います。そういうわけで、今、私たちは二兆円近い起債に悩んでいます。

沼田さんの特徴というのは、大変まじめで、堅実な方でした。起債がどんどん増えていつたところで、ぐつと抑えたわけです。どういう抑え方かというと、人件費を抑えた。県庁もそうですし、多分、教職員もそうだと思いませんが、給与を上げない。ボーナスなども一五%ぐらいカットする。だから、私が立候補したときに、「もう切りません。ここまで給与を切られたら、やる気をなくしてしまう」と申しあげましたけれども、沼田さんはそういうことをなさつたわけです。そういう意味では、一般会計だけ見れば、思つていたよりは健全でした。

問題は、その使われ方です。私たちの橋本内閣後的小渕内閣の景気対策は公共事業へどんどん投資していくということでした。千葉県はあまり国のいうとおりに投資をしないよう、むしろ必死になつて悪者になつて断つてきたそうです。それも、知事になつてみんなと分からぬことでした。

しかし国の政策があれだけ公共投資に重点を置いてしまつた以上は、敷き出した道路を途中で止めるわけにいかないのです。ですか

ら、千葉よりは大阪が、神奈川、東京が、とういうように大変な財政状況になつているということが言えます。

これはどういうことに起因するのか。やはり世界が変わつていく中で、金融にしても年金にしても薬価にしても、建設にしてもすべて護送船団方式的なものが、ずっと戦後の高度経済成長の名残として突出してきているからだと思うのです。

空白と低迷の原因が見えてきた

世界がどんどん動いている中で、日本がそれにどう先見性を持つて対処するのかという機転がきかないのです。ですから、女性政策一つとっても韓国の方が今や進んでいる。ITもそうです。飛行場を見たら、ますますです。韓国も香港も日本より進んでいる、という事態になつてしまつていて。

きょうは、私の古巣へ来たものですから、つい口が滑つていろいろ話してしまつてしまつ。まだ私の中で言葉として凝縮していないし、これまで話したことはないのですが、感覚的な感想を言わせていただき、千葉県の知事になつてみて、逆に自分が中央でやっていった政治がなぜ空白だったのかが分かつた。なぜ、あれだけ低迷してしまつたのか、とい

うことがやつとかすかに見えてきたのかな、と感じているところです。

ひつくり返した言い方をすれば、もし、私がジャーナリストとしての三十年間、そして十二年間の国會議員という経験を持つていなかつたら、今、怖くて千葉県の知事をやっていられなかつたんじゃないかな、という気すらしています。しかも、国際的な仕事をしていたので、いつも千葉県政を見るときに、足元から見ながら、同時に国のレベルと、それから地球のレベルと、両方から見るようになります。頑張つていけるのかな、という気がしていません。

女性知事で変わつたことですが、さつき申しあげたドメスティック・バイオレンスは、どこの県もやつていますから珍しくありません。が、医療のことと言えば、アメリカではもう二十年前から女性のための外来ということが進んでいます。

例えば心臓一つとつても、男性と女性と全然違ういうことが最近分かつてきただけであります。ところが、今までの日本の医療は、男性と同じ量の薬が女性にも処方されていた。例えば更年期障害の問題とか骨粗しょう症の問題だけではなくて、一般的の病気の中でも女性専門のクリニックが必要だ、ということを国

会議員としての最後のころにやつていました。ですから、早速に東金病院で、女医さんによる女性専門の外来というのを予算をつけスタートさせました。二百万円とか三百万円という小さい予算なんです。ただ、知恵と視点の問題です。

それから、情報公開ということで、県庁の職員たちはすごく努力して県庁のホットラインを充実させてくれました。何日かおきにどんどん新しい情報を入れるようにします。私自身のホットラインも生かしています。それから、ファックス。知事のいすには、実は私は座っていないんです。何か裸の王様になりましたから。知事のいすは飾って、隣のワーキングデスクに座っていますが、本物の知事のいすの後ろにファックスを置きまして、県民からどんどんファックスを送つていただきています。

これらをばらばらに考えるとネガティブにとかく言わがちです。「北と南と違いますよね」なんてよく言われるんですが、私は逆だと思うんですね。二十一世紀は多様性の時代に入りました。この多様性こそが、また六百万人という人口の多さこそが、千葉の活力と可能性になつていくのだと思います。

最初に申しあげたような地球規模の価値観にどれだけ千葉が追いつき、そして、それだけの展開を行政的にも、ビジネスの世界でも、教育の面でも、できるようになるか。「東京をリードする千葉を目指して」という言葉で、私の話を終わらせていただきたいと思いま

丸山町というところですが、北海道よりも千葉県の方が古いんです。それに漁業も盛んでます。

一方で、京葉の重工業地帯です。ここが今、どんどん新しいビジネスへと企業自体が転換しています。

また「千葉都民」という言葉は私は嫌いですけれども、いい住環境をつくろうとすれば、非常にいい東京のベッドタウンになる。それから成田空港、千葉港という、国際的な空港と港を持つていて。

最初に申しあげたような地球規模の価値観にどれだけ千葉が追いつき、そして、それだけの展開を行政的にも、ビジネスの世界でも、教育の面でも、できるようになるか。「東京をリードする千葉を目指して」という言葉で、私の話を終わらせていただきたいと思いま

質疑応答

花岡信昭（企画委員・代表質問）無党派知事誕生が続いているわけですが、この動きと政党政治というものどう考えていらっしゃるか。

堂本 私は、民主主義の原則は、政党政治だろうと思っています。ただ残念なことに、今、政党が政党として機能しなくなっている。日本の政党政治は言葉の上では新しいことをかかげます。私がいたさきがけも理想的な綱領を持っていたと今でも思っています。国民も政党に期待し、政党も変わろうとしている。にもかかわらず、機能しない。なぜか。それは、どんなに新しい綱領をつくろうが、旧態依然とした、いわゆる後援会方式、業界団体方式、労働組合方式といった選挙が続いてきたためだらうと今は分析しています。

ただ、はつきり申し上げなければいけないことは、とかく世の中の人々は、知事選挙とそうした国政選挙とをざたごとに「無党派の時代」と言っている。しかし、国政選挙の場合に、果たして無所属でいいのかということが考える必要があると思います。

私自身が参議院に立候補するつもりでしたから、そのときに果たして無党派というの

国政の中はどういうポジションなのか。やはり政党というのはきちんとあるべき存在なのだろう。やたら政党が無党派を取り込んでというようなことの方がおかしい。無党派という場合は、県知事あるいは市長といったポジションの場合ではないのか。

しかし、残念ながら、そのところをはつきりと峻別していない。無党派の知事がなぜ選挙に勝ってきたのか、そして無党派の本質とは何なのか、さらに既存の政党がなぜだめなのか。こうした議論までがなされていないように思います。

例えは私の選挙でさえ、決して無党派の人ばかりの支持ではなかつた。確かに無党派が六〇%と、圧倒的に多かつたことは事実です。でも、自民党、民主党、社民党、共産党から一〇〜二〇%という票が私のところに来てしまつた。政党を支持している人でさえ、県知事選挙においては私を支持したということなのです。

ですから、逆に政党の意味を考えたときに、自分たちの国に対するビジョンを明確に打ち出すことだと思うのです。リーダーシップだけの問題ではない。安保条約でも何でもいいのですが、政党としてこういう方針でやるんだということを明確に示す。その上で、今までずっと五十年間続いてきた選挙のやり方

から脱皮する。そうしたときに、日本に本当に意味での新しい政党政治が出てくるんじやないか。

今の無党派と言われている方たちは、政党のありようには満足していないのです。だから、私も政党支持者から支持されていたわけではないということだけは、申しあげたい。だから、私も政党支持者から支持されていたわけです。

花岡 田中真紀子外相が外務省事務当局とあつれきを起こしています。千葉県庁の事務当局の流儀に違和感はありませんか。

堂本 就任してまだ二カ月ですが、全く県庁の職員とはぶつかってないですね。けんからしいことも一度もない。論理的に政策についての議論はします。特に予算のときは、大変な政策論議をしました。

やり方は、確かにこれから変えていく必要があると思っています。中央官庁もそうでしたが、すべてが下からの積み上げ方式なんですよ。今、これだけの激動のときに、しかも千葉県として財政的にも苦しいときに、何もかも総括的にやっていたのでは力が出てない。だから、一点集中で、ここはどうしてもやろうというのがあっていいはずなのに、積み上げ

方式だと、それができない。これは国の場合も全く同じでした。

行政の長として唯一違うとすれば、テンポ

です。私が百メートルの選手の速さで走つているとすれば、行政の方はマラソンの速さで走るよう今まで習慣がついてきた。ただ、小泉政権になつてからというもの、まるで猫の目のように、あまりに速く中央が動くので、油断もすきもないと思つています。

今までのようないべースで仕事をしてくれるな、そんなのんびりしているうちに置いていかれてしまう、と県庁職員にも言つているんです。私はすぐ、「じゃ、それは国土交通省に電話します」とパツと電話をとつたり、「それは環境省と話した方がいいわ」と言って電話をとつたりするんですが、そうしたことは今まで多分なかつた。

それと、もう一つ言えは、私の方が日本の中でもどちらかと言えば国際的なレベルでいろいろ活動していましたから、国際感覚は県職員に少ないかもしません。

花岡 三番瀬の問題についてうかがいたい。保全に向けて見直しをすると発言されていますが、今、どこまで進んでいて、いつご

ろ具体的な方針を決定するのでしょうか。

堂本 三番瀬は日本全部から、ことによつたら国際的なところでも選挙のおかげで有名になりました。諫早と同じぐらい有名になりましたけれども、だからこそ、千葉としては理想的な解決をしたい。「日本でもあそこまでできたのか」というような解決をしたいと思つています。同時に、早さも必要だと思つています。

けれども、途中で五月雨式に情報を出してしまふと、大体崩れるんですね。この問題に関与している人がものすごくいる。

パズルでいえば大変難しいパズルですし、こんがらがつた糸を解くようなものです。でも、途中でそれをこうしたいああしたいと言うと、ますますこんがらがっていくような気がしています。ですから、今はできるだけその糸をすつかり解いて白紙に戻して、そして新しい計画として、三つをやらなければいけないと思つています。

問題として計画を立てていく必要がある。ですから市川市の処理場のキャパシティという局部的な問題としてではなく、千葉県全体としての下水処理のあり方を、長期的に考えなければいけないと思います。

三番目は、干渴をどう守るのか、鳥たちをどう守るのか、海の流れをどう守るのか、魚をどう守るのか。そして、そこに住む市川市の方たち、船橋市の方たちがどのように、里海を楽しみ、活用していくのか、大変複雑なパズルではありますけれども、解きにくく問題をできるだけ早く解いて、そして時間を置かずにやつていきたいというのが今のところです。

花岡 いろんな議論があり、石原東京都知事との調整も恐らく必要になるのだろうと思いますが、成田空港問題についてはどんなお考えですか。

堂本 しょっちゅう成田から飛び立つてた私にとっては切実でした。石原都知事と似た感性を持っているかもしれません。日本国として空の便をきちんと確保しない限り、国全体の経済に相当影響すると考えています。人を運ぶということはもちろんですが、物流という意味でもです。

来年五月に暫定滑走路が開港して一・五倍になります。けれども、それでも七年先ぐらいいが精いっぱいだと思います。それまでに日本国としてはどうしていくのか。これを整備しなければならない。

とりあえず今は、関東の国際空港は成田しかないので、東京—成田間のアクセスを一刻も早く整備しなければいけない。成田新高速鉄道をぜひ早く着工して、できるだけ早く完成させたいと思います。予定では平成二十二年となっていますが、できれば前倒ししたいと思うくらい、早くに開通させたい。そうすると、東京—成田間が四十分以下になります。

羽田の国際化は相当難しい問題をはらんでいますから、四、五年、長くかかれれば十年や二十年かかるでしょう。ですから、日本として国際空港をこれからどう位置づけ展開していくのか、という国としてのビジョンを一刻も早くつくる必要があると思います。今、ちようどそういった議論がスタートしたかなと思っています。石原知事とも二十年、五十年というケタで空港問題を解決する必要があるということについては、意見は違つていません。

若林誠一（NHK） 私は以前、成田空港詰めの記者をやった経験があります。この問

題が始まつて三十五年たつているのに、今なお長引いている。もうそろそろ本当に最終的に決着しなければならない時期に来ていると思いますが、県として、地元の自治体として、どのようなことが今できるのか、あるいはしたいと考えておられるのか。

もう一点、千葉県で土地収用システムが完全にマヒした状態が続いています。そのことによつていろんなところに不健全なしお寄せが出ていていると思うのですが、それをどうなさるおつもりなのか。

堂本 成田の問題ですが、多分、前の知事と相当地に違うポジションをとっていると思います。実際にまだそこに居を構えておられる農民の方が多い。国が最初のところで非常に不条理なスタートを切つてしまつたということで、私どもの方から強引に、これだけ時間がたつたんだからということは口が裂けても申しあげられない。それだけの犠牲と、それから生涯に近い、大変な歳月にわたつて反対運動をしてこられた方たちの思いというのはあると思います。

そこに対する対応は、筋から言つても国と空港公団です。ただ、私ども県としてできることは、成田周辺の活性化です。経済的な活性化、国際化、物流の拠点としていくため

に、ただ受け身ではなくて、もうちょっと前向きに取り組んでいかなくてはならない。騒音の問題もあります。そうした問題についても、県の領域ですから、相当積極的に関与していきたい。

國の方には、先程のアクセスの問題もさることながら、一・五〇〇メートル滑走路を一刻も早く県としてお願いをしたいと思います。就任三日目に当時の森総理大臣と国土交通省の扇大臣にお願いにまいりました。

つらいのが、土地収用委員会の問題です。これがない県は日本で一つ、千葉県だけです。

実際、土地収用委員になつた方は、そんなにすごいことをされたのかと思いましたが、一年たつても入院していらしたと聞きます。ご家族とかお子様など、いろんな方に対してあらゆる嫌がらせがあつたということで、土地収用委員になつていただける方がなくなつてしまつた。これは日本のある種とても不幸な問題です。これは千葉県だけの問題ではないと私は思います。

そうではないですか。千葉県の空港ではないんですよ。ある意味では日本中で使つていい空港。その成田が、きのうも事故があつたらマヒしてしまつた。たつた一本の滑走路しかないです。このままでは、よその国から国際線が飛び込めない。閑空に行つてもら

うぐらいしかない。こんなことでいいのかと
いうことです。

私の中で、まだ具体的にはなっていません
が、どうにかしなければならない。何らかの
知恵を出す組織でもつくるんでしょうか。何
とも決めていませんけれども、このままほう
つておくつもりはありません。

志村弘雄（毎日OB）道路特定財源の問題
についてうかがいたい。宮城と三重の二人の
県知事は道路特定財源に対しては実にシビア
な反応でした。

堂本 私はもともと目的税反対論者です。
目的税というのは時間がたつていく間に環境
が変わってしまう。だから、目的税を最初に
設定しない方がいい。環境税ですら、そう思
うことがあるわけです。

しかし、あの道路特定財源というのはあま
りにも膨らんでしまったと思っています。で
すから、それを切り替えて、ほかの用途にき
ちんと使えるようにすべきだと思います。た
だ、道路特定財源に反対というのとは別の視
点で、知事として言わせていただけば、一般
会計の中に埋没させてしまつたのではちょつ
と残念な気がします。成田新高速鉄道などに
振り向けていただけたらとも思います。大規

模なお金がかかることですから。しかも、千
葉県だけの利益ではなくて、関東周辺、首都
圏全部にとつて利することです。それこそそ
ういうところに振り向けてもらいたい。

それから、産廃の問題があります。

これも広域の問題です。まさに道路を使つてどんどん
産廃が入つてくる。道路が拡充されればさ
れるほど、産廃の問題は深刻になる。それか
ら、ディーゼル車の排気ガスの問題も深刻に
なつてくる。

ですから、一般会計に埋もれさせてしまう
よりは、はつきりとメリハリのつくほかの財
源への切り替えというのはどうか。私はそう
してもらえたらとてもうれしいと思つていま
す。

（文責・編集部）